

福永武彦とジュリアン・グリーンにおける死の主題（一）

井上三朗

目次

一 はじめに

二 グリーンの場合

(1) 『人みな夜にあつて』

(2) 『アドリエヌ・ムジュラ』

(3) 『私があるなら』

(4) 『漂流物』

(5) 『幻を追う人』

三 福永の場合

(1) 『草の花』

(2) 『海市』

(3) 『死の島』

四 おわりに

(大字は今回掲載分)

## 一 はじめに

福永武彦とジュリアン・グリーンとの比較については、以前、小説作法・小説技法という角度から、さらに、不可能な愛の主題という観点から、その作業をくわだてたことがあった。そして福永がグリーン(1)の文学に接することで、内的リアリスムを追求することのうながしを受けるとともに、できるだけ数多くの人物の立場に立つて物語を作るという方法を撰取したのではないか、という仮説を提出した。また作中人物たちを孤児の境遇に置いていること、人物たちの愛を不可能にするような障害を設定していること、人物たちの愛が夢想のなかの愛であり、一部の人物が純粹志向を有すること——こうした点に、福永にたいするグリーンからの影響を想定した。とはいえ、内容・主題面で二人の文学をくらべるとなれば、死の主題という視座からの比較がどうしても必要になってくる。というのも、福永もグリーンも、人間が孤独のなかで死ぬという事実を凝視するところから出発しているからだ。パスカルは『パンセ』のなかで、「人はひとり(1)で死ぬ」(…on mourra seul)と書いているが、この一文に表現された人間的条件を、両者はどちらも真正面から問題にし、自らの重要な文学主題として、死の主題に取り組んでいる。

ところで、福永の『草の花』のなかで、次のような一節が目に残る。

「一人の人間は、彼が灰となり塵に帰ってしまった後に於ても、誰かが彼の動作、彼の話しぶり、彼の癖、彼の感じかた、彼の考え、そのようなものを明かに覚えている限り、なお生きている。そして彼を識る人々が一人ずつ死んで行くにつれて、彼の生きる幽明界は次第に狭くなり、最後の一人が死ぬと共に、彼は二度目の、決定的な死を死ぬ」(2、

三五六頁)。

ここでは、人間の二度の死のことが言及されている。肉体の死と記憶のなかの死である。死者は生者に記憶されているかぎり生きていることが主張されている。同じような考え方は、グリーンンの作品においても見いだすことができる。『ヴァルナー』のなかで、彼はこう語っている。

「われわれ人間は三度死ぬ。最初は肉体のなかで。二度目は、生き残った人びとの心のなかで。そして三回目は、これが最後の、いちばん冷え冷えとした墓なのであるが、生き残った人びとの記憶のなかで」（Ⅱ、七一四頁）。

この文章では、人間の三度の死が問題になっている。世を去った者は、生者の心のなかで、さらには記憶のなかで生きているかぎりは、完全に死んだわけではないとする見解が表明されている。つまり福永とグリーンンは、人間の死は記憶のなかの消滅によって完結するとの見方を共有している。この点、『草の花』の先の一節は、『ヴァルナー』の中のこの文章の奏であるとみなすことができる。福永がグリーンンの見解を参照したかどうかは定かでない。けれども人間の死にかんする二人の見方には類似性が認められる。この点からも、両者の文学を、死の主題という観点から比較することは、意義あることとなる。

そこで以下において、最初にグリーンンの五つの小説を、死の主題との関連のもとに分析する。まず、死の恐怖の典型的な例が示されている『人みな夜にあつて』を取り上げる。次に『アドリエヌ・ムジュラ』のムジュラ氏の在り方、『私があなたなら』の変身の物語を、死への恐れとのかかわりで検討する。それから『漂流物』における死の魅惑を一瞥したあと、『幻を追う人』を少し仔細に読解する。死の主題がもつとも濃密に扱われているからだ。このあと、福永の作品からは、『草の花』『海市』、それに『死の島』を選び、死の主題という角度からしらべたい。その理由は、この三つの小説が、福永における死の主題の処理の仕方を端的にあらわしているようにみえるからだ。とくに『死の島』は、作品の表題からうかがえるように、この主題を前面に押し出しているので、若干丁寧に分析する。このように、グリーンンと福永の作品を個別的に読解するという手続きを経たうえで、影響関係について考察したい。

## 二 グリーンの場合

(1) 『人みな夜にあつて』

グリーンンの『人みな夜にあつて』を見てみることにしよう。この小説は、ウイルフレッドというカトリックの信仰をもつ若者を主人公とし、主人公が叔父のホレスの住む館を訪れるところから始まる。ホレスは病いのため臨終の床にあり、縁者たちを館に来させたのである。縁者たちがプロテスタントの信者であるなかで、ホレスはウイルフレッドと同じく、例外的にカトリック教徒である。そこで彼はウイルフレッドに目をかけ、終油の秘蹟を受ける前に甥を枕もとに呼び寄せ、有価証券を与える。これにたいしてウイルフレッドは、死に瀕した叔父への「真の慈愛の気持ち」(Ⅲ、四六〇頁)を自分のうちに見いだすことができない。内心を支配するのは、「恐怖と嫌悪」(Ⅲ、四六〇頁)だけである。この「嫌悪」は、自分が生を享受・謳歌しているのに、叔父がおぞましい死のほうに接近するのを目の当たりにして生じた感情であり、「恐怖」とは、死それ自体への反応である。ウイルフレッドは恐怖に負けまいとして、ポケットから「アルコールの入った」瓶をひそかに取り出し、「空にし」ている(Ⅲ、四六一頁)。最期を迎えた叔父を前にして、隣人への愛を感じることができないほどに、死への恐れにとらえられるのである。

叔父の他界ののち、ウイルフレッドは死を意識しつつ生きることになる。第二部第十八章、教会で告解をし、帰宅した彼は、古典的な信仰の書『キリストにならいて』を読みながら、「さいごの面会の瞬間におけるホレス叔父の眼」を思い浮かべ、それが「垂直に沈んでいく男の眼であつた」と認識している(Ⅲ、五四九頁)。「垂直に沈」むとは、奈落の底に落ちるということである。この認識から死へのおののきがかいま見える。ウイルフレッドは、「結局のところ、死ななければならぬのだし、人はいつでもそこに至るのだ」(Ⅲ、五四八頁)と考え、「死はいたるところに、街角にも、教会のなかにも、

店にも、バーにも、ベッドにも、男や女の肉体のなかにも存在する」(Ⅲ、五四九頁)と思案する。死の不可避性への確認が、日常生活のなかに死が遍在するという自覚をもたらしている。このようにウイルフレッドは、叔父の前で死の恐怖をいだいたことを契機にして、死の想念にとりつかれる。つまり死に魅せられる。彼においては、死の恐怖が死の魅惑を喚び起こしている。

死の恐怖は、最期に臨んだホレスをも見舞っている。ウイルフレッドを枕もとに呼んだ彼は、有価証券と、若い頃に書いた恋文の入った封筒を手渡ししながら、「わしはもう信じておらんのだ。信じられんのだ。もう信仰はない」と切り出し、「一生のあいだ、わしは幸福を……とどのつまり……快樂を追いもどめてきた」と白状する(Ⅲ、四六一頁)。地上的・肉体的なよろこびの探索が、ホレスの信仰を衰えさせた。ウイルフレッドは、「叔父の盲目のまなざしのなかに、死への恐怖がこみあげてくるのを見る」(Ⅲ、四六一頁)。ホレスにおいて、「死への恐怖」と信仰の衰弱とはわかちがたく絡みあっている。この二つは互いに影響をおよぼしあっている。死の恐怖は、信仰の衰弱の結果であると同時に原因ともなる。叔父の告白を聞いたウイルフレッドは、必死の祈りによって、「神よ、私たち二人に信仰をお与え下さい」(Ⅲ、四六四頁)などと涙ながらに訴えることによって、叔父に心の平安を得させる。ホレスは終油の秘蹟を受け、信徒として息をひきとる。とはいえ、それに先立って、彼が信仰を見うしなうほどまでに、死の恐怖に襲われることは、注目に値する。『人みな夜にあつて』において、死の恐怖は主人公ウイルフレッドだけでなく、ホレスの心をも揺り動かすのである。

## (2) 『アドリエヌ・ムジュラ』

『アドリエヌ・ムジュラ』におけるムジュラ氏の在り方に目を向けることにしよう。この小説の筋は、アドリエヌの、モルクール医師との出会いに端を発する。郊外の街道で、馬車に乗った医師を偶然見かけたアドリエヌは、恋におちいる。以後、彼女は医師との再会を願って、郊外の街道への散歩を繰り返す。モルクールが近所に住んでいることを聞き知ってか

らは、部屋の窓から、医師の白壁の館を眺めては、夢想にふける。また夜になると外出して、白壁の館のあたりをうろつく。アドリエンヌの挙動は、やがて父親ムジュラ氏の関知するところとなる。第一部第五章、ムジュラ氏は娘を外出させまいとして、夕食後、家族そろってトランプ遊びに興じようとする。医師の館のほうに行きたいアドリエンヌは、うわの空でゲームをする。ムジュラ氏は立腹し、娘の行状を話題にする。「毎日、午後の五時半から六時のあいだ、お前はジェルメーヌの部屋に上がって、窓から身を乗り出し、待ち伏せしている」(I、三二三頁)と責める。たしかにアドリエンヌは、医師の館がよりよく見えるという理由から、姉ジェルメーヌの部屋にしのび込むのである。ムジュラ氏は、アドリエンヌが夜、誰かと逢っていると決めつけ、「お前は誰かを愛しているんだね」(I、三二三頁)と詰め寄る。アドリエンヌが「ええ」と返事すると、ムジュラ氏は、「相手は誰だ？」と問う(I、三三三頁)。アドリエンヌは、「名前は知らない」(I、三三三頁)と答えて、口をつぐむ。ムジュラ氏は娘の肩をつかみ、「もはや抑えられない激怒に突き動かされて」、「あらん限りの力」で体を揺さぶり、娘を失神させる(I、三二四頁)。そして翌日から、娘の外出を禁じる。

この挿話から、ムジュラ氏の横暴さ、サディズム的態度がうかがえる。と同時に、習慣への固執が浮かび上がる。ムジュラ氏は日常生活の営みに、支障がきたされることを断固として拒否する。習慣は絶対であり、定まった時間割どおりに、事が運ばれることを強く望む。アドリエンヌの夜の散歩は、習慣に亀裂を入らせるものであり、だからこそ、彼は激怒の発作にとらえられるのである。

ムジュラ氏の習慣へのこだわりは、上の娘ジェルメーヌにたいする振る舞いからも見てとることができる。ジェルメーヌは胸の病いをわずらっている。第一部第九章で、病いの悪化のために部屋から離れられなくなり、自室で食事をとろうとする。けれどもムジュラ氏は上の娘の病いを頑として認めず、「ジェルメーヌは完全に健康なんだ」(I、三四五頁)と言い張る。彼はジェルメーヌを無理やり食堂においてこさせ、一緒に食事をさせる。ムジュラ氏のこうした行動にかんして、作中、「彼は家の中の習慣に変化がもたらされることを、ひどく嫌っていた」(I、三四四頁)と説明されている。

ムジュラ氏の習慣の遵守を、アンドレ・ブランシェは不安<sup>(angaise)</sup>とのかかわりで理解している。日常生活に変化の兆しが現われたとき、ムジュラ氏が「病的な怒り」に襲われるのは、ブランシェによれば、「秩序というものが彼によって實際上、聖なるものの水準に高められてはいるものの、この偽りの絶対にごんなにわずかな障害が生じて、この絶対が実は相対的なものであることを暴露するから」であり、結局のところ、彼の生き方は、「漠然と認識されていて、絶え間なく抑えつけても、そのたびに生き返ってくる不安を隠している」という<sup>2)</sup>。ブランシェの言う「不安」とは、もちろん存在の不安のことである。ムジュラ氏の「病的な怒り」は、彼のうちで抑圧されてきた欲望と存在の不安との発露であると解せる。彼が娘たちを、「偽りの絶対」である「秩序」に服従させるのは、サディスム的欲望を満たすためだけでなく、存在の不安を忘却し、あるいはこの不安から逃れたいからでもある。ところで、存在の不安は、人間がこの世でいつの日か必ず死ぬという揺るぎない事実と密接に関連する。それはこの世で生きることの不安であるとともに、死ぬことの不安でもある。存在の不安は死への不安・恐れを包含する。それゆえ、習慣に拘泥するムジュラ氏の在り方をおして、死への不安・恐れが読みとれる。

グリーンンの作品のなかで、わが子にたいして暴君的に振る舞う人物は、ムジュラ氏だけにとどまらない。『モンシシネール』のフレッチャー夫人は、吝嗇のために、娘エミリーに、冬、暖炉の薪を自由に使わせない。『レヴィアタン』のグロジヨルジュ夫人は、学力の向上しない息子アンドレをはげしく折檻する。『幻を追う人』のプラス夫人は、娘マリー・テレーズの修道生活の夢・希望を打ち砕く。サディスム的姿勢を見せる、これらの人物たちの内心を支配するのも、死の恐怖が混入した、存在の不安であることを、ここで付言しておきたい。

### (3) 『私があなたなら』

『私があなたなら』を問題にすることにしよう。この小説の主題は変身である。主人公ファビアンは夜の街でブリットマ

ールという老人に遭遇し、悪魔的な人間というより悪魔の化身であるこの人物から、「自分から出て、他人になる」(Ⅱ、八一頁)術を授けられる。フアビアンは早速、勤務先の事務所の主人であるブジャールに変身する。一万フランの小切手を書き、銀行で換金する。だがブジャールは富と権力を有するものの、六十歳の老人であり、肉体的に健康ではなく、腰に痛みをかかえている。フアビアンは一刻も早くブジャールの肉体を離れようと心に決める。カフェで出会った、若くて逞しいポール・エスメナルに一万フランの金を手渡したあと、この男になり変わる。ところが、ポールは頭脳明晰でなく、フアビアン記憶をうしなってしまう。しかも自分の執着する女ベルトを、ほかの男と寝ていると錯覚し、嫉妬と怒りから絞め殺してしまう。ブリットマールが、ポールに姿を変えたフアビアンを助けにやってくる。ポールを安全な場所に誘導し、ポールにフアビアンであることを思い出させる。それからフアビアンをエマニユエル・フリーージュに変身させる。フリーージュは質素な生活をしながら、真理を探求する。聖者になることを夢み、肉体の誘惑とたたかう、三十近くの知性豊かな男である。フリーージュとなったフアビアンは、フリーージュの知性のおかげで、フアビアン記憶を保持する。フリーージュであり、かつフアビアンなのである。フアビアンフリーージュは文房具屋でジョルジュという六歳の少年を見かける。少年は母親の言いつけで何かを買いに店にやってきた。フアビアンフリーージュはジョルジュの純真さ、あどけなさに心を打たれ、この子どもになりたいと思ひ、通りで子どもの耳もとで呪文をとなえる。この呪文は変身を叶えさせる悪魔的な力をもつ。けれども呪文は、悪に染まっていけない無垢な子どもには効き目を発揮しない。そこでフアビアンフリーージュは、美しさを誇るカミーユという人物に変身する。

以上が、フアビアンの変身の物語である。フアビアンを行動に駆りたてるものは何か、について考察しよう。まず、ブジャールやカミーユへの変身がそうであるように、財産欲・権力欲であり、美へのあこがれである。これとともに、好奇心、他人の心の中を覗きたいという願ひ、ひいては、自己が自己でしかないことの狭隘さから脱却し、他人になり変わることで、自己(の人生)の可能性を拡大したいという望みが挙げられよう。だが変身願望のなかには、不死・不滅への大願も入り混



じっていることを、是非とも認めるべきである。この点にかんして、グリーンは『私があなたなら』を執筆中、「この連続的な変身への欲求が、死にたくないという願いに対応していることを示さなければならぬだろう」と『日記』に書き記している。たしかにファビアンが、若さと健康に恵まれたポール・エスメナルになり変わり、六歳の子どももジョルジュへの変身を希望するという事実は、「死にたくないという願い」と結びつけて把握することができる。若者や子どもでいるかぎり、肉体の滅び<sup>1</sup>死からは遠いところに位置するからだ。若さへの憧憬は不死への野望を前提とする。無論、子どもに戻ったからといって、生の有限性は完全には解決されない。ファビアン<sup>2</sup>フリージュがジョルジュになり変わったあと、次の変身が可能になるように配慮するのは、ひとつにはそのためである。不死・不滅への悲願を達成するためには、変身の果てしない連鎖が必要なのだ。ところで、この悲願の根底には、死への不安・おのきが横たわっていることは論を俟たない。はつきりと自覚されていないとしても、「死にたくないという願い」は、死への恐怖に立脚する。『私があなたなら』の変身の物語も、死の恐怖とのかかわりでとらえられるのである。

#### (4) 『漂流物』

『漂流物』を取り上げることしよう。この小説の主人公はフィリップ・クレリーというブルジョアである。彼は亡き父親から鉱山の会社をひき継いだ。しかし会社籍を置いてだけで、なんら貢献することができない。重役たちからは疎んじられ、無視されている。フィリップはそんな自分に嫌気がさして、とうとう職を辞すのであるが、物語は、彼が夫婦喧嘩を目撃するところから始まる。十月のある晩、帰宅の途中、セーヌ河畔を歩いているとき、フィリップは口論している一組の男女を見かける。女は「セーヌ河に突き落とされるのではないかと心配している」(Ⅱ、五頁)。フィリップの姿を認めた女は、「旦那！」(Ⅱ、六頁)と呼びかけ、救いをもとめる。だが彼は「ためらい」を覚え、「あとずさり」し、場所を離れる(Ⅱ、六頁)。この逃亡行為は、臆病さを証すものとしてフィリップの記憶にのこり、悔恨を生じさせる。帰宅した

彼は三時間後、良心の呵責に耐えかねて、現場に舞い戻り、近くにいた警官に、事件があつたかどうか訊いている。フィリップは何もなかつたことを知らされても、安堵せず、「女は今、家で眠っているか、それとも死体がサン＝クルーへ向かつて流れているのだ」（Ⅱ、二六頁）などと思案をめぐらせる。彼は、女が死んだ可能性を排除しない。

こうしてフィリップの内心では、セーヌ河は死と結びつく。第三部第五章、セーヌ河畔で夫婦喧嘩を突見した時点から四カ月後、彼は、「河の流れに沿って。サン＝クルーの橋で、五十歳位の女性の死体が引き上げられた。遺体は数カ月間水中にあつた模様である」（Ⅱ、一九一頁）との新聞記事を読む。ここにおいて、作品冒頭でフィリップに助けをもとめた女が、男に河に突き落とされて溺死したことが暗示される。フィリップにとっては、セーヌ河は死をもたらすものであり、 $\langle$ 死 $\rangle$ の象徴となる。

第三部第六章（最終章）、フィリップは息子ロベールを連れて散歩に出かける。二人はセーヌ河畔を歩く。「水を眺めたいという欲求」にとらえられたフィリップは、息子を置いて、「一人で岸へ向かい、少し身を乗り出」す（Ⅱ、一九九頁）。これは死に魅せられた行動である。水 $\parallel$ 河は死をひき起こすからだ。このあと、「不快で強烈なセーヌ河の臭いが彼の顔に立ち昇ってきた。彼はそれを吸い込んだ」（Ⅱ、一九九頁）という記述がつづく。ジャック・プチはこの記述を踏まえて、「セーヌ河はいくらか、フィリップの人生の象徴である」と解釈している。プチがこう解釈するのは、おそらくセーヌ河の「臭い」のなかに生命を嗅ぎ分けるからであろう。だがこの「臭い」は生の香りではなく、死の臭いではないのか。セーヌ河が「フィリップの人生」を象徴するとしても、それが死にひたされた人生であるからにはほかならない。実際、フィリップは無為と倦怠のなかで単調な日々をすごしており、彼の人生は生気を感じさせない。作中、「生涯ずっと、理由はわかり得ないままに、この河は彼の心をひきつけてきた。河と彼とのあいだには、一種の神秘的な血縁関係が存在していた」（Ⅱ、一九九頁）と叙述されている。この「血縁関係」は、セーヌ河もフィリップの人生も、死を連想させることに由来する。彼はいわば死を生きているがゆえに、死の象徴としてのセーヌ河に親近感をいだき、心惹かれるのだ。とはいえ、河は「彼をこわがらせ」

る（Ⅱ、一九九頁）。「河の上にわずかに身を傾けるだけで、すぐさま胸が締めつけられ」る（Ⅱ、一九九頁）。フィリップは河に死に魅せられながらも、河にたいして恐れを感じる。つまり死の恐怖を断ち切れないのである。

このあと、フィリップは、自分のほうに近づいてくるロペールを元の場所に戻しながら、自殺について熟考する。「人は金持ちで、完全に健康であるとき、自殺したりはしない」と自分に言い聞かせたり、「人は倦怠から自殺することができるとか？」と自問したりして（Ⅱ、二〇〇頁）、死への誘惑を斥けようとする。しかし死は、「ほとんどこの河と同じように」、フィリップの「気をそそ」る（Ⅱ、二〇〇頁）。彼は「死の恐怖をいだ」きながらも、「今朝、死ぬことは一歩前に踏み出すことにすぎなかった。この動作をいとも簡単にできると言うこと自体が、一つの奇妙な誘惑となっていた」（Ⅱ、二〇〇頁）と語られているように、河に死に魅惑され、自殺への衝動にかられるのである。

同じような心の動きは、エリアーヌからも認められる。義理の弟フィリップの家に同居するエリアーヌは、彼にたいして不可能な愛の情熱をいだいている。この不毛な情熱の苦しみのために、彼女は以前、家出をし、マドモワゼル・ド・モロゾの下宿屋に身を寄せたことがあった。第三部第二章においても、エリアーヌは空しい執着の念を断ち切るために出奔を夢みる。「おそらく今すぐ、永遠に出て行ったほうがよいのかもしれない」と彼女は判断し、「霧に包まれた国へのメランコリックな旅」を想像する（Ⅱ、一六九頁）。だがエリアーヌは家出への思いを斥けてしまう。「すでに一度はこころみたのに、帰ってきた。自分はフィリップのものであるからだ」（Ⅱ、一六九頁）と確認しているように、彼女の心はフィリップに完全に占領され、義理の弟への愛情から逃れられないことがわかっていからだ。とはいえ、夢想の過程で、エリアーヌが、「或る雨の日に、断崖の先端まで行つて、そこから身を投げるだろう」と黙想し、「この考えをたど」ることに「一種の気晴らし」を見いだしている点は、看過することができない（Ⅱ、一六九頁）。「断崖の先端」から「身を投げる」とは、自己を死にゆだねることである。暫時ではあれ、エリアーヌもまた、死に魅せられ、自殺への誘惑にかられるのである。

フィリップの妻であり、エリアーヌの妹であるアンリエットもまた、死に魅せられる。彼女は愛のない夫婦生活をつづけ

ていて、ヴィクトール・ティスランという男性と不倫の関係を結ぶことで、かろうじて生の潤いを得ている。愛人がいるものの、アンリエットもまた、フィリップと同じく、総じて無為と倦怠の日々を送っており、彼女の生活も生気を感じさせない。第三部第三章で、アンリエットは自宅のサロンの窓から身を乗り出して、夢想にふける。この件りで、「もう少し身を傾けさえすればよかった。夢のまっただ中で、彼女はそのことを知った。こうして死は、希望をもたない人たちの心をひく不確かな美しい地帯のほうへと、やさしく彼女をおびき寄せた」（Ⅱ、一七七頁）という文章が注意をひく。この文章は死の誘引を表現している。死に魅せられたアンリエットにとつて、死は「美しい地帯」にある。その「地帯」に到達するためには、「もう少し身を傾けさえすればよい」。彼女は自殺への誘惑にとらえられている。このあと、息子のロベールが、アンリエットの腕の下に手をしのび込ませ、肘をしっかりとつかみ、「身を乗り出しちゃダメだよ！」（Ⅱ、一七八頁）と注意する。我に返った彼女は、「死への動物的な恐怖」が「自分のうちで増大する」のを感じる（Ⅱ、一七八頁）。アンリエットの場合、フィリップの場合と同様、死の魅惑は死の恐怖をともなっている。一方、エリアーナにおいては、死の想念は行爲をとおしてではなく、純粹に瞑想のなかで芽生えるので、恐れを随伴しない。こういった違いはあるにせよ、『漂流物』のなかでは、三人の主要人物の内面から、死の魅惑が看取される。

### (5) 『幻を追う人』

さいごに、『幻を追う人』を、主人公マニユエルの死の意識という観点から検討しよう。マニユエルの内面世界の全容は、彼が執筆した『在り得たこと』によつて知ることができる。この物語を分析する前に、マニユエルが実生活で死の想念をいだき、その挙げ句、物語を構築するに至るまでの過程をたどつておきたい。

マニユエルの死の想念は、胸の病いの悪化とともに発生する。従妹マリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出した翌日、マニユエルは健康をそこね、勤め先のエルネスト氏の店を早退する。夜の散歩は欲望の所産であつたが、純粹志向を有するため、

己れの欲望とたたかった。このことで彼は疲弊するのである。マニユエルは病いの床につく直前、マリー＝テレーズにだしぬけに、「どこにいるの？」（Ⅱ、二四九頁）と訊く。「誰のこと、マニユエル？」と従妹が問いかえすと、「善良な乳母のとき」と答える（Ⅱ、二四九頁）。いったい、この「乳母」とは誰のことなのか。まず思い浮かぶのは、マニユエルの面影をみているプラス夫人である。しかしこのとき、マニユエルは「錯乱した目」をしており、マリー＝テレーズは、彼が「謔言を言っている」ような印象をいだいている（Ⅱ、二四九頁）。マニユエルが正気をうしなっていることを考慮すると、彼の口にした「乳母」がプラス夫人を指すとする見方は、無理がある。ジャック・プチは、この「乳母」のイマージュが「死のイマージュ」<sup>(5)</sup>であると断定している。プチがこう解釈するのは、『在り得たこと』に登場するジョルジュ夫人が、この「乳母」の延長上に位置する人物だとみなせるからである。後述するように、ジョルジュ夫人は死を体現する。とすれば、この「乳母」もまた、死を表徴することになる。「乳母」は「善良な」と形容されているものの、人間に執拗に寄り添って、生の終わりに人間を永遠に眠らせるもの、すなわち死のことだとうけとれる。かくしてマニユエルは夜の散歩の翌日、衰弱のなかで死を意識する。

マニユエルの病いは、夜の散歩の一件が伯母のプラス夫人や料理女の知るところとなり、しかもその件にかんじて聞きただす伯母の前でしらを切ったことで、悪化する。有罪性の意識が彼をさいなむからだ。とはいえ、マニユエルはエルネスト氏の店に出るようになる。すると、氏の妹のベルト嬢から医者に診てもらおうよう勧められ、ブラール先生のところへ行く。診察室に入ったとき、彼は、医師の「質問が理解できないほどに」（Ⅱ、二八一頁）、怖じ気づく。マニユエルの恐怖は性格の臆病さに起因するのではない。医者は患者にたいして生か死かの判決をくだしうる存在である。裁判官のように、無罪を言い渡すこともできるし、刑あるいは刑の執行猶予を決定することもできるし、死刑を宣告することもできる。こうした医者<sub>者</sub>の役割を視野に入れると、彼の恐怖は、死へのおののきが混入したものと理解できる。診察が終わったあと、ブラール医師は、「恢復と希望という言葉を口にする」（Ⅱ、二八二頁）。だがマニユエルは安心しない。「人が希望という言葉を使う

のは、危険にさらされた人間にたいしてだけだ。絶望が目に見えるときに、人は希望という言葉を口にするのである」(Ⅱ、二八二頁)と判断するように、医師に励まされることで逆に、自分の病いの救いがたさに思いを致す。この思いは、自分がやがて死ぬという意識と表裏をなす。マニユエルは医師の診察を受けることによって、死の想念をつのらせるのである。

マニユエルはブラール医師から、六カ月間の労働を禁じられ、エルネスト氏の店での職を辞す。家にひきこもるようになった彼は、生のよろこび・幸福を味わうことがあるにしても、それは瞬間的・例外的なことにすぎない。「死ぬことの恐ろしい不安」が「もはやほとんど」彼の心を「離れな」くなる(Ⅱ、二八七頁)。マニユエルは基本的に「窒息と苦悶の時間」(Ⅱ、二八七頁)を過ごす。闘病中の内心の苦しみを、彼は次のように吐露している。

「ぼくは一度ならず気づいていた、死と隣り合わせにあるとき、どれだけ宗教が価値のないものであるかを。魂と来世について教えられた一切のことは、ぼくを待ちうけている恐ろしい現実に比べれば、ぼかげたごまかしのように思われた。そしてぼくが覚えたお祈りは、死ぬことの恐怖にたいしてなんの救いにもならなかった。ぼくは額の汗をぬぐうために、顔の上にシーツの端をひき寄せるのだった。ああ、誰かが来てくれたら！ しかしこうした瞬間にぼくは一人きりだった」(Ⅱ、二九〇頁)。

マニユエルは幼年時代、カトリックの信仰を有していた<sup>(6)</sup>。しかしこの一節では、死の恐怖にたいして、宗教がまったく無力であることが強調されている。カトリシスム(またはキリスト教)は靈魂の不滅と来世での復活を説く。こうした教えは自分を「待ちうけている恐ろしい現実」、すなわち死を前にしては、「ぼかげたごまかし」にしか彼には思われぬ。祈りも役に立たない。マニユエルは、「こうした瞬間にぼくは一人きりだった」と締めくくっている。彼は宗教に帰依することができないがゆえに、孤独のなかで死と対峙し、死の恐怖とたたかわなければならぬのである。

このように、闘病生活に入ったマニユエルは死の恐怖にとりつかれる。けれども数週間後、病いは小康状態を得る。外出できるほどに体力を取り戻した頃、マニユエルはマリー・テレーズと、家に遊びにきた彼女の友だちのポーリーヌとエドメ

・ド・ガイヤルデとを連れて、ラ・コンブの森に散歩に出かける。森で彼は目隠し鬼ごっこをしようと提案し、自らは鬼となつて少女たちを追いかける。マニユエルは従妹やポーリーヌには欲望をいだいている。だが彼には純粹志向があるので、追跡は欲望の体験であるとともに欲望とのたたかひの体験ともなる。したがつて、この森の散歩は、先に言及した夜の散歩と同様に、彼の病いを悪化させる。さらに、マニユエルは鬼ごっこをしているとき、エドメの体に触つて、エドメを逃げ帰らせていた。エドメから話を聞いたサンクティス神父が、夕方、森の中のマニユエルの振る舞いを非難しに、家によつてくる。プラス夫人は神父を追い返す。ちょうどそのとき、羅紗商人のジョルジュ・エспанシヤ氏がマニユエルに仕事を世話するため、家を訪ねていた。プラス夫人とマニユエルは申し出をことわることで、羅紗商人をも敵にまわす。サンクティス神父とジョルジュ・エспанシヤ氏は世間を代表する人間である。それゆゑ、マニユエルは世間から撤退・孤立した中で、完全な蟄居のなかで闘病生活をするを強いられる。こうした状況のもとで、マニユエルは自己の現実から脱出するため、『在り得たこと』の制作に没頭するようになる。

『在り得たこと』を瞥見することにしてしよう。この物語は現実逃避の欲求に基づいて書かれたとしても、書き手のマニユエルが死の恐怖をいだいているので、死の想念に充ち満ちたものになっている。『在り得たこと』の舞台となるネーグルテルの城は、ジャック・プチが規定するように、「死の城」である。以下において、その理由を説明するとともに、城の住人たちがどのようにして死と向かいあうかを見ていきたい。この目的のために、伯爵、ジョルジュ夫人、アントワヌ、子爵夫人、マニユエルという順番で、登場人物たちの在り方をしらべることにする。

伯爵はネーグルテルの城に病いのため蟄居している。五十二歳のとき、「胃の一箇所、死が指を置く」のを感じた伯爵は「激しい恐怖感」を覚えつつ、「小さな部屋に閉じこもり、もはやそこから出ることはな」くなる(II、三三六―三三七頁)。伯爵の一族は遺伝的な疾患を背負っており、死の兆候を感じた彼は蟄居するに至るのである。伯爵の意識を占めるのは、死だけである。自分のそばでラテン語の祈禱書を朗読し、一緒に夜を明かしたマニユエルに、彼は、「娘に、まだ

今日のことではないようだ」と伝えておくれ」(II、三二四頁)と言いつけてゐる。「まだ今日のことではないようだ」(ce ne sera pas encore pour aujourd'hui)とどう文の主語の *ce* が、*へ死* (la mort または *ma mort*) を指すことは言うまでもない。伯爵は死を恐れつつも、死に魅せられる。ひたすらに自らの死に思いをさせ、死の訪れを待ちうけるのである。

このような在り方は、他者から見れば、死と馴れあつた在り方である。伯爵はマニユエルにとつて、「生きながらにして閉じこめられた」人である(II、三三九頁)。外界から遮断された小さな部屋で棲息する彼は、死者同然の存在と化す。伯爵は、「存在するということが合理的に説明することができない何者かに変貌」し、とうとう「死者たちの恐ろしい威光」を放つようになる(II、三四六頁)。閉ざされた空間で死を待つ彼は、死と対峙するがゆえに、死の世界の入り口に立つてゐる。というより、生者たちの目には、すでに死の領域に足を踏み入れ、死と同化した存在に映るのだ。ネーグルテールの城を死の城たらしめる要因として、まず第一に、こうした伯爵の存在が挙げられる。

第二の要因は、ジョルジュ夫人の存在である。夫人は以前は城の地下室に居て、召使の身分であつた。マニユエルが城にやつてきた時点では、伯爵の部屋で看護の役をひきうけている。ジョルジュ夫人は、伯爵に接することのできる唯一の人物である。なるほどマニユエルは祈禱文を読み聞かせるため、伯爵を間近で見ている。しかしこの任務は結局、一度しか遂行されない。それゆえ、ジョルジュ夫人だけが病いの床にある伯爵を看取つてゐるといえる。子爵夫人はジョルジュ夫人について、「あの女はその部屋〔父のいる部屋〕に、父と一緒に閉じこもつてしまいました。あの女をのぞいては、もはや誰もそこに入り込むことはできません」(II、三七〇頁)と、羨望の気持ちをこめて語つてゐる。伯爵の看護の仕事を与えたのは自分であるが、面会を禁じられてゐる子爵夫人には、ジョルジュ夫人が特権的な地位にあるようにみえるのである。

ジョルジュ夫人は周囲の者たちに、嫌悪と反撥の感情をいだかせる。子爵夫人は、彼女が「召使たちに嫌悪を催させてい」(II、三六九頁)ることを認めてゐるし、自分も同様であることを隠さない(II、三六八頁)。マニユエルは「嫌悪」のなかで、ジョルジュ夫人に向かつて「激しいと同時に冒瀆的な」言辞を吐きたい衝動にかられる(II、三二七頁)。こうした



反撥感、嫌悪感は何に由来するのであろうか。結論的にいえば、ジョルジュ夫人が死と隣接したところに、否、死の領域に身を置いているという事実には、これらの感情は源を發する。實際、夫人の地下室での暮らしは、暗闇の中でのものであるがゆえに、まったく生氣を感じさせないし、臨終の床にある伯爵の部屋に入ってから、死との結びつきはいっそう深まっている。要するに、ジョルジュ夫人は死を連想させるのだ。

子爵夫人は、「父が亡くなったら、あの女は誰か別の人の枕もとにやつてきて腰をすえることでしよう」と推察したあと、「あの女は、あれをもっとも恐れている者たちをあらがいがたく惹きつけるのです。まずわたしの弟を、それからこのわたしを……」と明言している（Ⅱ、三七〇頁）。ジョルジュ夫人は人に恐怖をふきこむとともに、人を「惹きつける」力をもっている。人を恐れさせつつ、誘引・魅惑するというのは、死の属性である。死が病いに臥せる者たちを訪れるのと同じように、ジョルジュ夫人は死に瀕した者に近づく。子爵夫人の脳裡では、ジョルジュ夫人は死と同一化される。子爵夫人はマニユエルに、「一、二度、私はあの女がそれ自身、死なのではないかと自らに問うたことがあります」（Ⅱ、三六九頁）と肺肝を披いている。子爵夫人にとって、ジョルジュ夫人は死を体現した存在である。この見方は、マニユエルも共有しうるし、普遍的な見方である。死を待つ伯爵にくわえて、死の化身であるジョルジュ夫人が存在することで、ネーグルテールの城は、死の城としての性格をいやすのである。

伯爵の息子、アントワーヌのあり方に目を転ずることにしよう。父親が病いで臥せったとき、アントワーヌは学業を終えようとしていた。彼は監視のゆるみに乗じて、しばらく自由を満喫する。しかし父との面会は死の恐怖をもたらす。作中、「あまりよく鍛えられていない彼の精神はついに、とても高い家から下に身を投げるように、恐怖に身をゆだねるのだった」（Ⅱ、三三七―三三八頁）という一文が見いだせる。「いつか父と同じように生を終えなければならないという思い」（Ⅱ、三三八頁）にとらえられたアントワーヌは、父親の同意を得て、異国への旅に出る。そして放蕩にあけくれる。この放蕩は、欲望の充足のためというより、死の恐怖をまぎらせ、克服するためのくわだてとしてある。

しかしながら、アントワーヌはまもなくネーグレルの城に召還される。彼は再び伯爵を見舞うようになり、死の恐怖を昂じさせる。ある夜、アントワーヌは父の枕もとで、「不意に嗚咽を漏ら」し、「絶望の大きな叫び声」をあげて、「自分もまた同じように死ぬだろう、もう病いははじまっていて、数週間も前から感じている」と口走る（Ⅱ、三四二頁）。死の恐怖に翻弄される息子の姿を目の当たりにした伯爵は、以後、子どもたちの面会を謝絶し、完全な蟄居生活に入る。一方、父の前で自分の無力さ、弱さをさらけ出したアントワーヌは、すっかり変貌し、「厳しい、集中した重々しさ」（Ⅱ、三四三頁）を備えるようになる。「恐怖が彼を成熟させ」るのだ（Ⅱ、三四三頁）。もつとも、それは恐怖からの解放を意味しない。逆に彼は死の想念に支配されて、恐怖とともに生きるのだとみなすべきである。

このことは、伯爵の完全な蟄居ののち、アントワーヌが再度放蕩にふけるという事実から明らかである。放蕩が死の恐怖からの脱却を目指していることは、先に触れた。彼の荒々しさも死の恐れとのかかわりでとらえることができる。アントワーヌは酩酊状態のなかでジョルジュ夫人を追いかけまわす。栗林の小径で、向こうから小走りでやってきたマニユエルを、拳固の一撃で地面に倒す。このとき彼は、「お前が誰であろうと、俺の名を口にしたら、たたきのめしてやるぞ」（Ⅱ、三二―三頁）とはげしく威嚇する。またマニユエルは城の周囲の森に散歩に出かけて、馬に乗ったアントワーヌに遭遇する。この折、アントワーヌは、「誰がお前に、こんなところをうろつくことを許したのだ？」（Ⅱ、三五五頁）と問いつめ、馬の鞭でマニユエルの頬を打ち、手ひどい傷を負わせる。こうした凶暴さは、それが発現する相手にたいする私的な怨恨に根ざさな。相手が誰であれ、ふるわれる性質のものである。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、死の想念・恐怖をいだいて苦しまねばならないことの報復手段と解するべきである。

ところで、アントワーヌはマニユエルを鞭打つ直前、「お前に復讐の機会を与えてやるう」（Ⅱ、三五六頁）と言って、自分の頭めがけて石を投げるよう命じている。「でも、あなたを殺したら？」とマニユエルがたずねても、「お前なんかこわくない」と、意に介さない（Ⅱ、三五七頁）。彼にとって、マニユエルに投石させるということは、死の可能性に身をさらす

ことであり、死への挑戦を意味する。マニユエルは、自分の前には、「もうだめだと思つてゐる男」がゐるのだと悟る（Ⅱ、三五七頁）。「もうだめだと思」うとは、死すべき運命から逃れられないと観念することである。アントワーヌの内心が死の想念に満たされてゐることがうかがえる。マニユエルは、「自分自身の運命を知ることとは、恐怖にたいしてなんといいう鑑になることだろう！」（Ⅱ、三五七頁）との感慨にひたる。この感慨からは、生か死かの岐路に自分を立たせることによつて、死の恐怖に打ち克とうとするアントワーヌの意図が読みとれる。

それからマニユエルは、「おそらく彼は自分を不死身だと思つてゐるのであろう」（Ⅱ、三五七頁）と推し量る。この推量は、アントワーヌが「もうだめだと思つてゐる」とするはじめの判断と矛盾する。アントワーヌは一方では、死の運命を回避しえないと思いつつも、他方では、投石ぐらいでは傷つかないし、死なないと確信してゐることなのであろう。その確信するからこそ、投石を待つという行為が死への挑戦という意味をもちうるのである。さいごにマニユエルは、「恐ろしくて忌まわしい死、彼の死が、彼を保護し、のちのために彼をとつておくために、彼とぼくとのあいだに置かれてゐるような印象をいだ」く（Ⅱ、三五七頁、強調はグリーン）。アントワーヌは死の想念・恐怖とともに生きるために、マニユエルの目には、すでにして死の領域に足を踏み入れている存在、極論すれば、死と同化した存在に映る。だからこそ、死がアントワーヌを「保護」してゐると彼には思えるのだ。とはいへ、アントワーヌはいつの日か決定的な最期の瞬間を迎えなければならぬ。アントワーヌが死と同化してゐるがゆえに、マニユエルは彼の死を看取するのであるが、その死が「のちのために彼をとつてお」いてゐるとみなすのは、彼がそれでもやはり生きた人間だからである。それゆえ、マニユエルのさいごの印象からは、いまわの際まで死の想念・恐怖とともに生きなければならぬアントワーヌの苦悩の姿が浮かび上がってくる。

アントワーヌの在り方をさぐつた。彼の放蕩、荒々しさ・凶暴さ、死への挑戦を一瞥した。アントワーヌの生活は死ぬという人間の現実と密接に関連しており、彼が死と対峙しつゝ生きてゐることが瞭然とした。アントワーヌは死を恐れながら

も、死に魅せられている。彼の内面からは、死の魅惑と恐怖が露頭する。

子爵夫人もまた、死に魅せられる。子爵夫人とは、伯爵の娘であり、アントワーヌの姉にあたる人物である。夫人は父が病いの床につく以前に、すなわち妹が他界した時点で、死の魅惑を体験している。このとき、十四歳と六カ月であった。彼女は妹の死に顔に接して、「超人的な知恵のようなもの」(II、三七二頁)が刻み込まれているように思う。この「知恵」は、生者にはわかりえない死の神秘に通暁していることに立脚する。子爵夫人は「二日に十回も」(II、三七二頁)、妹の枕もとかかよう。生者の「知らないことを知っているこの少女を眺めに行」き(II、三七二頁)、死の謎にせまろうとする。「制禦しがたい好奇心」(II、三七二頁)がこの頻繁な行動にかりたてたと、夫人は認めている。子爵夫人は早くも少女時代から死に魅せられ、「生とは幻覚であり、大いなる現実とは死であるという考え」(II、三七二頁)に支配される。

このような見方をする子爵夫人にとつて、日常生活は意味・意義をもたない。夫人が誰かを愛するということはありえない。人生の一大事であるはずの結婚も重要性をもたない。結婚は一人の成人女性になるための通過儀礼でしかなく、なんら生活を改善しない。行き当たりばつたりの結婚をした子爵夫人は、娘時代と同じ生活をつづける。『在り得たこと』のなかで子爵がほとんど登場しないのは、ということはずなわち、子爵夫人が夫と交わらないのは、夫人が子爵を愛していないということもあるが、子爵が生のだ中において、死の想念にとりつかれた夫人とは無縁の存在であるからである。

伯爵が子どもたちを疎んじ、完全に蟄居してからの子爵夫人の挙動を見てもことにしよう。子爵夫人は父親がなかなか絶息しないことに堪忍袋の緒を切らせて、城のなかで宴会や舞踏会を幾度も催す。夫人は、父の病状が快方に向かっていると嘘をついて、客たちをもてなす。こうした振る舞いは、医者<sup>10</sup>の来診をはばむことを目的としている。また生の喧騒を伯爵の耳にまでとどかせることで、生の世界との断絶性をいっそう意識させ、最期を早めることをねらっている。子爵夫人が司祭を伯爵になかなか会わせないのも、伯爵を死に追いやりたいからである。というのも、司祭は魂の平安を与えることによって、結果的に延命させることができるからだ。伯爵の世話をするジョルジュ夫人が、話をしないよう命じられているとい

う事実も、こうした文脈のなかで了解することができる。作中、「この非人間的な規則」（Ⅱ、三三九頁）を思いついたのが、子どもたちのどちらであるのか、明記されていない。とはいえ、ジョルジュ夫人に看護の仕事を与えたのは子爵夫人であるのだから、この思いつきが夫人の意向にかなっていることはたしかである。子爵夫人はジョルジュ夫人に沈黙をまもるといふ命令を課すことによつて、伯爵を生の世界から追放し、死の領域に幽閉したのである。この命令もまた、伯爵の死期を早めることを目指している。

こうした一連の行動は、憎悪・怨恨といった、父親その人にたいする感情の発露ではない。なるほど子爵夫人において、娘としての愛情は欠落している。だがこの欠落が、父の死を願う直接的な理由になるわけではない。この願いの根底には、死の恐怖が横たわっているのではないだろうか。伯爵が闘病生活に入ること、死は「大いなる現実」として、ますます子爵夫人の意識を支配することになる。死への意識は当然、死の恐怖をともなう。伯爵が生きながらえるかぎり、死の想念・恐怖は消滅しない。子爵夫人はこれらから逃れるために、伯爵の絶命を望むのだと推考できる。

けれども伯爵は、生者たちの世界から隔絶したところで生きのびる。その結果、伯爵は「死者たちの恐ろしい威光」（Ⅱ、三四六頁）を放ち、死はなおさら子爵夫人を魅了する。「わたしは知りたいのです。どんなふうになそれが、生命がおわるのかを。そうです、どんなふうにして人が死の中に入っていくのかを」（Ⅱ、三七一頁）と、子爵夫人はマニユエルに胸襟を開いている。夫人の脳裡を占めるのは、もはやどのように生きるかではなく、いかにして死ぬかである。生の問題ではなく死の問題が彼女の関心事である。かくして伯爵の存在は死の恐怖をふきこみつつも、死に誘引するという両義的な性格を帯びる。子爵夫人は、「死に刃向かうこの老人〔伯爵〕をおそれ」つつも、夜、「父の部屋で何が起こっているのか気がかりになつて」、長椅子で眠るジョルジュ夫人を起こしては、父親の様子を逐一問いただす（Ⅱ、三四五―三四六頁）。この行為は、子爵夫人が伯爵の死を恐れながらも、死に魅せられていることを証している。子爵夫人は、「父はすでに、わたしたちを死者からひき離している曖昧な国を横切っているのです」（Ⅱ、三七一頁）と認識している。伯爵は死の謎を解く鍵をにぎ

っていると思われるがゆえに、子爵夫人をいよいよ死のほうに惹きつけるはたらきをしている。

子爵夫人において、死の魅惑が死への恐怖と絡んでいることについては、父が息をひきとると夫人が思った日の夕食後の行動にかんする、マニユエルへの次のような打ち明け話からもたしかめることができる。

「ネーグルテールから遠ざかるにつれて、わたしの心はだんだん軽くなつていくような気がしました。森は歌声や呼びかける声に満ちあふれていました。わたしが通りがけると、獣たちが枯葉の中でうごめいていました。声や笑いや鳴き声に満ちたあの暗闇のただ中で、わたしは自分の幸福をもっとよく感じとろうと、一瞬立ちどまりました。死がわたしを探し出さないであろうような隠れ場所を、夜に護られた窪地をみつけたような気がしました。でもわたしは戻りませんでした。城にひきかえしたのです。

(…)わたしはここ以外のところでは生きることができません。何かがわたしを心ならずもここにひきとめるのです」  
(Ⅱ、三六七—三六八頁)。

この打ち明け話のなかでまず注目されるのは、死の城から遠ざかることで、子爵夫人が「幸福」を感じているという点である。この幸福感は生きることのよろこびを意味し、死の恐怖とは明確に対立する。しかも夫人はこのとき、自分を死からまもってくれる「隠れ場所」―安全地帯に在るような印象をいだいている。けれども子爵夫人は城に舞い戻る。「わたしはここ以外のところでは生きることができません。何かがわたしを心ならずもここにひきとめるのです」というさいこの談話は、夫人が完全に死に魅せられていることを示している。城を去れば、生きるよろこび・幸福を享受しうるにもかかわらず、死の魅惑に抵抗することができずに城にひきかえす。このような在り方の淵源には、死の恐怖が隠れている。この恐怖が夫人の意識の深層を牛耳っているがゆえに、死の神秘の解明にいざなうものとして、ネーグルテールの城が彼女を呪縛するのである。子爵夫人はマニユエルに、弟や自分が城から「逃げ出したいと思うことがある」にもかかわらず、「好奇心」のために離れられないのだとも告白している(Ⅱ、三七〇頁)。この告白も、死の恐怖と魅惑との関係を浮き彫りにする。死の恐

怖は、死の城からの脱出願望を生じさせるとともに、死の神秘に肉薄したいという欲求を喚び起こし、城にひきとめる機能を有する。つまり死の恐怖は死の魅惑の支配下に子爵夫人を置いている。

『在り得たこと』の末尾近くに置かれた、マニユエルとの性行為の場面に論及しよう。父親が不帰の客となった日の夜明け前、子爵夫人はマニユエルの部屋を訪ね、ベッドの中にもぐりこむ。子爵夫人が不意に出現した理由として、夫人のうちに潜在する肉体的欲望が挙げられる。この欲望が伯爵の他界を契機として堰を切り、氾濫し、彼女をうごかしたと想定できる。とはいえ、抑圧された欲望のみによって夫人の妄挙を説明するのは無理がある。というのも、夫人の意識を支配するのは、死の想念であるからだ。子爵夫人がマニユエルのもとにやってくるのは、死と対峙しつつ生きることでの緊張が極限状態に達したからである。この点にかんして、マニユエルを訪ねた子爵夫人は、「あの女（ジョルジュ夫人）がわたしを探しにくるのではないかと恐れたので、ここに来たのです」（Ⅱ、三七六頁）と弁解している。この言葉は意味深長である。ジョルジュ夫人の忌避は、死との対峙にもはや耐えられなくなったことに原因している。子爵夫人は、絶え果てた父と対面して死の恐怖、もしくは死にまつわる苦悩に翻弄されることを回避したいのだと思われる。夫人にとって、マニユエルとの性の交わりは欲望の所産というより、へ死から逃避するための絶望的なくわだてであると判定することができる。

子爵夫人は、性行為のさなかに息絶える。夫人の最期はいかなる意味をもつのだろうか。夫人の立場に立てば、死との対峙が極度の緊張のなかで、疲弊と衰弱とをもたらし、死をまねいたと分析できる。伯爵が逝くとき、子爵夫人は自らの生命も尽きてしまうほどに憔悴していたのである。死と向かいあつてきた夫人にとって、父親の死は自らの死に等しい。マニユエルとの肉体的交渉は、自分のうちにわずかに残る生命力の最後の燃焼にほかならず、自らの滅亡へのむなしい抵抗であると同時に、自己の人生を完結するためのがむしやらかなころみであると解せる。グリーンは『幻を追う人』を制作中、「マニユエルの人生のさいこの日々は、一種の死の修業とならねばならないだろう」と、『日記』に書きとめている。伯爵が蟄居してからの、子爵夫人の城での日々も、「マニユエルの人生のさいこの日々」と同じように、まさしく「一種の死の修業」

とみなしうる。伯爵が永遠の眠りにつくことによつて、「死の修業」に終止符が打たれる。「死の修業」を完了した子爵夫人を待ちうけるのは死だけである。マニユエルとの性行為は、死出の旅路につくための儀式という性格を有している。

『在り得たこと』のなかで、検討すべき人物がもう一人残っている。登場人物としてのマニユエルである。彼は実生活において、病いにたおれ、死とたたかうことを余儀なくされた。マニユエルの想像世界への脱出、『在り得たこと』の作成は、死の恐怖のなかでなされた。物語のなかのマニユエルがこの恐怖との関連でどう生きるのかを概観したい。

マニユエルはラテン語の祈禱文を朗誦するため、臨終の床にある伯爵と対面したとき、「恐怖」(Ⅱ、三二二頁)に見舞われる。この「恐怖」は死へのおののきである。だが留意すべきことに、彼は「その恐怖よりもさらに強い好奇心」(Ⅱ、三二二頁)にとらえられる。「恐怖というもののなかには魅惑の力がひそんでいる」(Ⅱ、三二二頁)と述べているように、マニユエルは死を恐れるがゆえに、死に魅せられる。「生きながらにして、死の中に滑りこみつつあるこの人間の奇妙な光景」を目にすることで、彼は、「ぼくたちの沈黙よりもずっと深い沈黙の国の境目にまで接近していく」ような印象をうける(Ⅱ、三二二頁)。ここで問題になっている「国」とは、死の国のことである。マニユエルは伯爵に接することで、生と死との境界線に近づいたような、言いかえれば、死の神秘に肉薄したような感覚をもつ。この点において、伯爵との面会のひとときは、特権的な瞬間であつたといえよう。

このように特権的な瞬間を体験したマニユエルは、ネーグルテールから離れられなくなる。彼は子爵夫人からしばしば横柄な態度をとられ、アントワーヌからは、二度にわたつて暴行をうける。恥辱をこうむつたマニユエルは、一旦は城を去る腹を固める。けれども子爵夫人から待遇の改善を申し出られて、決意をひるがえしてしまう。彼が城にとどまるのは、子爵夫人にたいするひそかな執着のせいである。だがこれとともに、ネーグルテールの城が死の城であることも関与している。マニユエルは、「心の底からぼくはネーグルテールを憎んでいた」と明言しつつも、「たとえ追い払われたとしても、おそらくぼくは戻っていただろう」と推測している(Ⅱ、三六六頁)。彼は死に魅せられ、死の謎を解き明かしたいがゆえに、城



での滞在をつづけるのである。

しかしながら、マニユエルは死の恐怖から逃れることはできない。子爵夫人から、「今夜、父は死ぬでしょう」（Ⅱ、三六三頁）と告げられた日の夜、マニユエルは恐怖にさいなまれ、煩悶の時間をすごす。寝つけない彼は、「体を汗びつしよりにして」（Ⅱ、三六四頁）、ベッドから飛びおちる。「ベッドで休むことがあるとしても、そこで死ぬということもまた同様に真実であるから」だ（Ⅱ、三六四頁）。「幾度となくぼくは死の恐怖を味わったが、いつもそれを前にして同じように無防備のままだった」（Ⅱ、三六四頁）と、マニユエルは述懐している。この述懐は、彼における死の恐怖の深さを覗かせる。すでに見たように、死の恐怖は、死の魅惑の力を強める。死に戦慄することによって、マニユエルはますます死に魅せられ、ネーグルテールに呪縛される。マニユエルの立場は、子爵夫人やアントワーヌのそれと同じになる。

マニユエルは子爵夫人の打ち明け話の聞き手 (confidant) となりながら、「死の修業」をおこなう。夫人と死にかんずる会話をかわすことで、死の恐怖に対処し、問題を解決しようとする。子爵夫人は肉体の交わりのさなかに絶命することによって、マニユエルにたいして決定的な役割を果たす。マニユエルの側からとらえるならば、性行為は死との交合を、したがって、「死の修業」を意味する。実際、この行為は死をもっとも身近なところで見させるがゆえに、殆ど死そのものの体験であると認定できる。ネーグルテールでの滞在がマニユエルにとって「死の修業」となるのは、伯爵の危篤と死に因るといふより、子爵夫人との交渉が存在するからである。マニユエルは「恐怖」「苦悶」あるいは「嫌悪」(horreur) のなかで、子爵夫人の抱擁に耐え、最期に立ちあう（Ⅱ、三七七—三七八頁）。これはまさに「死の修業」を構成する。子爵夫人との性交の場面は、死の魅惑と恐怖が頂点に達する場面である。夫人はその絶息の仕方によって、マニユエルの「死の修業」を完結させている。彼に残るのは、自らの死しかない。げんにマニユエルはこのあと、現実世界に回帰し、死のほうにおもむき、命を落とすのである。

実生活におけるマニユエルの死の想念と恐怖を一瞥したあと、彼の制作した『在り得たこと』の人物たちの在り方を探查

した。死を体现する、ジョルジュ夫人をのぞけば、人物たちはことごとく死に魅せられ、かつ死を恐れていることが判明した。登場人物としてのマニユエルはもちろんのこと、子爵夫人、アントワーヌ、それにネーグルテルの城を死の城たらしめる伯爵の内心においても、死の魅惑と恐怖が認められる。死の想念が託されているという点で、伯爵、アントワーヌ、子爵夫人は、物語の作者であるマニユエルの分身的存在である。彼らはマニユエルの内面世界を映し出し出している。ともあれ、『在り得たこと』が挿入されることで、『幻を追う人』は死の魅惑と恐怖に満ちあふれた世界となっている。

グリーンの五篇の小説を、死の主題とのかかわりで読解してきた。ここで章のまとめをおこなっておこう。総じて言えることは、グリーンの中人物たちが死の恐怖をいだいているという点である。『人みな夜にあつて』の主人公ウィルフレッドや、臨終の床にあるホレス叔父は、死の恐怖に見舞われる典型的な人物である。『アドリエヌ・ムジュラ』のなかの、習慣に固執するムジュラ氏は、サディスム的姿勢をみせる代表的な人物として、その存在の不安をとおして死への恐れをも露呈している。『私があなたなら』における、フアビアンの変身の物語からも、死の恐怖がかいま見える。死の恐怖が死の魅惑を喚び起こす場合もある。『幻を追う人』がそうである。主人公マニユエルは実生活で病いにおかされ、死の想念にとりつかれる。そうしたなかで執筆された『在り得たこと』は死の恐怖と魅惑に充ち満ちた世界であり、この物語では、死の恐怖が人物たちを死の魅惑の支配下に置いていける。死を恐れるがゆえに、死に魅せられるという点では、『人みな夜にあつて』のウィルフレッドも同様である。死の魅惑は、『漂流物』においては、ちがったかたちで扱われている。フィリップ、エリアーヌ、アンリエットという主要人物たちは、死への誘惑、自殺の衝動にかられるという意味において死に魅せられる。しかしこの場合でも、フィリップとアンリエットは死の恐怖に襲われる。死の主題という視座からとらえると、グリーンの子の作品の基調となっているのは、死の恐怖であると論断することができる。

### 三 福永の場合

#### (1) 『草の花』

福永武彦の小説を死の主題との関連でとらえてみることにしたい。最初に『草の花』を取り上げよう。この作品は四つ部分から成り立つ。プロローグの価値をもつ「冬」(第一部)と、汐見茂思の手記である「第一の手帳」(第二部)と「第二の手帳」(第三部)、およびエピローグに相当する「春」(第四部)である。第二部において、汐見は旧制の高校生であった十八歳のときの、藤木忍への一方的な愛を回顧し、第三部では、二十四歳のときの、藤木千枝子との愛を振り返る。千枝子への愛は、兄の忍への愛とはちがって受け入れられる。だが千枝子は汐見を愛しながらも、汐見と別れる決意をし、高等学校時代、汐見と同じ弓道部にいた石井の結婚の申し入れを受諾する。時代は戦争のさなかであり、汐見は出征する。早くもこの時点で、汐見は自らの死に思いをはせる。出征のため東京をあとにした汐見は、夜汽車のなかで、「藤木、君は僕を愛してくれなかった。そして君の妹は、僕を愛してはくれなかった」と、心の中で亡き忍に話しかけながら、「僕は一人きりで死ぬだろう……」と確認する(2、四七九頁)。二度の愛の挫折を体験することによって、汐見は孤独感にひたされるとともに、死の想念にとらえられる。

汐見において、死の想念は、手記を書く時点、あるいは、第一部の「冬」の時点で強まる。この時点における汐見の内心の動きをさぐることにしたい。「冬」は第四部の「春」と同じく、サナトリウムにいる「私」という語り手によって語られている。汐見はこの「私」と同室の患者である。汐見は軍隊生活をつづけるうちに体をこわし、復員ののち、しばらく働いたけれども、健康をさらに悪化させ、サナトリウムに入る羽目におちいった。すでに三十歳になつてゐる。

三十歳の汐見の在り方を特徴づけるのは、孤独である。汐見は「冗談も言ったし、人を笑わせました」し、「気が向くとよく喋った」が、「いつも自分の廻りに一種の孤独を置い」ていたと、「私」は伝えている(2、二五三頁)。汐見は「私」と親

しく会話している折にも、自分の「孤独の中から特に胸襟を開いて歩み寄って来ることをしな」い（2、二五四頁）。他者に心をひらくことなく、己れの孤独のなかに閉じこもる。もつとも、孤独は、汐見が愛しているときでも、彼の内面から見てとれた。十八歳の彼、二十四歳の彼は愛に生きるにもかかわらず、自らの孤独に執着し、拘泥する。それは「強靱な意志に貫かれた孤独、英雄の孤独」であり、「生命の充足感」「眩暈のような恍惚感」をもたらし（2、二八八頁）。それについて、手記をしたためているときの孤独は愛のない孤独であり、「めそめそした、一日一日の生の中に溺れつつ押し流されて行くような」、そんな「哀れっぽい孤独」である（2、二八八頁）。要するに、三十歳の汐見は生きるに値しないような孤独のなかに身を置いている。

重い胸の病いに冒されている汐見にとって、現在は未来と同様に無きものに等しい。「第一の手帳」の冒頭で、「僕は現在も未来もない人間で、ただ過去を持つているばかりだ」（2、二八七頁）と彼は認識している。ほんとうの意味で生きたといえる時代が過去にしかない者には、過去をもう一度生き直す以外に、生きる道はない。「僕のようにもはや新しく生き得ない人間、束縛された日常を課せられている人間にとって、過去を再び生きることの他にどんな僕だけの生き方があるう」（2、二八九頁）と汐見は自問し、「回想の世界にはいれば、僕は自由に歩き廻ることが出来るのだ。思い出すことは生きることなのだ」（2、二八九―二九〇頁）と自分に言い聞かせている。汐見において、現在を生きるとは、過去を回想すること、過去を生き直すことである。なるほどそれは「現在からの脱出」（2、二八九頁）であり、「一つの逃避」（2、二八九頁）、現実からの逃避を意味する。しかし「脱出」「逃避」をこころみる以外に、汐見には生きる手だてはないのである。この点において、汐見は、グリーンの小説『幻を追う人』の主人公、マニユエルと類似する。マニユエルもまた、胸の病いをわずらい、森の散歩によつて世間の響聲を買い、蟄居生活を余儀なくされ、「現在からの脱出」、現実からの「逃避」をくわだてる以外に生きる方法がなくなつた。ただマニユエルの場合、「脱出」「逃避」は、想像世界への脱出・逃避であり、彼が制作した『在り得たこと』は、虚構の物語である。これにたいして、汐見の「脱出」「逃避」は、自己の過去に向かっ

てのものであり、「第一の手帳」および「第二の手帳」は、彼が実際に体験したことから依拠して作成されている。

汐見はなんのために追憶の世界に入るのか。第二部のはじめのところでは、「要するに、僕は間違っていないなかったのか」(2、二八九頁)との問いを彼が発している点は看過できない。汐見の回想の営みは、自己点検、自己確認のためになされている。彼は、「もし僕が悔なく僕の青春を歩いて来たのなら、悔なく死に向かつて歩いて行くことも出来るだろう。僕が僕の生を肯定することが出来るならば、僕は僕の死を自ら肯定し、ニーチェの謂わゆる自由の死を選び取ることも出来るだろう」(2、二八九頁)とも思索している。汐見は来たるべき死にそなえて、過去をさかのぼる。自己の歩んできた生の軌跡をたしかめたいと、自らの最期に臨みたいのであろう。二つの「手帳」の執筆は、死を前提としている。

ここにおいて、『幻を追う人』のマニユエルにとつての『在り得たこと』の作成との共通性が確認される。『在り得たこと』もまた、死を前提として書かれているのだ。ただ、マニユエルにあつては、『在り得たこと』の制作は、死の恐怖を克服することを目的としており、死の修業としての価値を有していた。ところが汐見の場合、過去に目を向ける決心をした途端、「看護婦の白衣も、葉くさい蒲団のにおいも、死の恐怖も、すべては一瞬に掻き消されてしまった」(2、二八九頁)と認めているごとく、死の恐怖は少しはあるものの、全面的に意識を支配する感情ではない。汐見は死の想念にとらえられるとはいへ、マニユエルほどに死の恐怖に苦悶してはいないのである。

このことは、サナトリウムの病室で、汐見が平気で煙草をすうことから明白となる。この行為は、同室の患者である医学生の良いちゃんをいらだたせる。良いちゃんは汐見にその非常識さをとがめる。「何よりも汐見の物に動じない態度、病状が悪くても人ごとのような顔をしたその落ちつきかたが、良いちゃんには一々彼への当てこすりのように受け取られる」(2、二五三頁)。(私)は汐見の、「謂わば生きることへの無関心」を指摘し、「まるで病気でも何でもないのに、間違つてサナトリウムの一室に紛れ込んだとしか見えなかった」と言っている(2、二五三頁)。また(私)は、「あらゆる患者が、死と、死の影とに怯えている中に、彼ひとりは何ものにも束縛されず、自由であるかのように見えた」(2、二五三頁)とも伝えている。

る。患者たちが死の恐怖におののいていの中で、汐見だけが超然と振る舞う。もつとも、「真実には、彼もまた、深く捉えられていたのだ」(2、二五三頁)と、(私)は説明を補足している。何に「捉えられていた」のか。言うまでもなく、死の想念にである。しかし汐見は来たるべき死のことを意識するものの、死におびえることはない。『幻を追う人』のマニユエルのように、死の恐怖に翻弄されることはないのである。

汐見における死の想念を具体的に見てみることにしよう。第二部で、汐見は、「僕のような重い病状の人間は、或る短い期間の後、確実に死ぬのだ」と断じ、「その時期はもうじき、間違いないやつて来るだろう」と予測している(2、二八七頁)。汐見は、自分の最期が間近に迫っていると確信する。また彼は、「今、僕は死臭に包まれて生きている」(2、三五三頁)と自覚する。若い多くの患者たちが息をひきとるサナトリウムでは、死は日常的現実である。この現実のなかで、汐見は、人間が「死と共に暮している」(2、三五三頁)と考えるに至る。「一人の例外もなく、人は皆、死の影の谷を歩いている」(2、三五三頁)との結論に達する。彼の死への意識は、「死の翼は常に、昨日も今日も羽ばたいてやまない」(2、三五三―三五四頁)とか、「戦争が終り、死の忌わしい影が日常から消え、これからは平和に暮せると思ったその瞬間にも、死が僕等を待ち受けていることに変りはない」(2、三五四頁)とかいった認識からも浮かび上がる。死が支配するサナトリウムの環境にあつて、汐見は死を意識しないではいられない。彼は死に魅せられているとみなせよう。

汐見における死の魅惑は、自殺への衝動ないし誘惑をひきおこしている。第一部で(私)は、汐見が今いるサナトリウムに移ってくる前、「自殺未遂で大騒ぎを起したことがある」(2、二六四頁)ことを、ある若い友人から聞きだしている。外人の宣教師の経営するBサナトリウムに、汐見とともにいたその友人は、汐見が「おとし昨年のおちようど今頃」、「病状も悪くてずっと寝たきり」の身なのに、「昼ごろから消えてしま」い、「夕食になつても帰つて来な」くて、「みんな手分けをしてあつちこつち探しに行」つたこと、「消燈時間が過ぎてから、ぶらつと一人で帰つて来た」ことを教える(2、二六四頁)。汐見は、「三角山の裏手の林の中で、決心がつかないで迷っていた」(2、二六四頁)という。この自殺への衝動・誘惑が、死に

思いをさせ、死に魅せられた挙げ句のものであったことは、贅言を要しない。

自殺未遂事件のあと、汐見は院長のすすめもあつてキリスト教の洗礼を受ける。へ私への友人は、「何しろあそこの院長は、自殺なんかされるのが怖いから、それで無理に洗礼をすすめたのかもしれないよ。信者になつたら自殺は出来ませんからね」(2、二六五頁)と解説している。とはいへ、受洗は一時的な心の迷いの結果にすぎず、何ら事態を改善しない。汐見は、「神は僕の前に姿を現さなかつた」と振り返り、「僕自身さえも自ら愛し得ない傲岸な僕の心が、神の嘉するところとならなかつたのは当然だろう」と省察している(2、二八八頁)。神は汐見には無縁の存在でありつづける。「僕は寧ろ、一時的にでも神に継ろうとした自分を憐み、憎んだ。僕には何ものもなかつた」(2、二八八頁)と、彼は顧みている。汐見は洗礼を受ける前と同じ状態にもどり、再び自らの死と対峙し、死を意識しないではいられなくなる。

汐見が肺摘の手術を望むのも、このような文脈のなかで把握されるべきである。肺摘の手術とは肺葉摘出術のことで、「一時間足らずの手術時間で済む成形とはちがつて、肺摘は「十時間にも及び、医師にとつても患者にとつても、なみなみでない決意を必要とする」(2、二六二―二六三頁)。「現在では、成形でも肺摘でも手術死ということは殆どないが、当時の肺摘には謂わば決死の覚悟が要つた」(2、二六三頁)とへ私へが報告しているように、肺摘の手術は生命を賭した危険な手術である。汐見は良ちゃんをはじめとする同室の患者の反対を押しきつて、この手術を受けることを希望する。彼は外科医の村田先生に、「先生だつて、僕みたいなケエスを手掛けてみたいという気持ちはあるんでしょう？」(2、二六五頁)と問いかける。村田先生が、「それは勿論ですよ、一人でも沢山やってみたい、何しろ肺摘を希望する人はまだ多いんでね」(2、二六五頁)と応じると、「じゃやつて下さい、医学の進歩のために僕の身体が役に立つとしたら僕は満足です」(2、二六六頁)と言ひ放つ。汐見は私へには、「もし癒らないのなら、むざむざ死ぬよりちつとでも医学の進歩に役立つ方がいい」(2、二六六頁)と話している。彼が死を覚悟していることがわかる。もつとも、汐見は、「万一、僕が癒るとしたら肺摘以外に方法がないのだ」(2、二六六頁)と断言しているように、「癒る」こと、生きのびることに期待をかけてもいる。しかし「万

「一」という言葉が端的に示すごとく、彼は、自分が「癒る」可能性はほとんどないと見積もっている。汐見にとつて、肺摘は生きながらえるための手段であるというより、死出の旅路につくための方便という性格をもつのではないだろうか。

手術の前日、個室に移った汐見は、手術をやめるよう言いきた良ちゃんに、「干渉されるのは厭だ」(2、二六七頁)と答え、自分のことを氣遣うへ私に、「そんなに死にたくない生命いのちじゃないよ、君とは違うよ」(2、二六八頁)と知らせている。汐見は生に執着しない。彼は、もし自分が死んだら、枕の下に置いてある二冊のノートをあげるとへ私に言い残して、手術にのぞむ。二冊のノートとはもちろん、『草の花』の中心をなす「第一の手帳」と「第二の手帳」のことである。手術は失敗に終わり、汐見は世を去る。第四部でへ私へは、手術の数日前、汐見が、「昔、僕は死ぬのが恐ろしかった。喪いたくないものが沢山あった。愛とか、幸福とか、青春とか、野心とか、そういうものだね。だから死にたくなかったのだ」(2、四八五頁)と告白したのを思い返している。また「今はもうこの自我の他に喪うべき何ものもない。そしてこの自我という奴が、僕の最も嫌いな代物だ」(2、四八五頁)と言い切ったのを想起している。昔の汐見は死の恐怖をいただき、生きたいと願っていた。だが手術直前の彼は、「最も嫌いな代物」である自我しかもたないがゆえに、生きることにまったくこだわっていない。へ私へは、「今にして思い返せば、その時には彼は死を決していたのだ」(2、四八五頁)と推察している。汐見にとつて、肺摘の手術は自我を葬り去るための手段であるといえよう。

第一部で、汐見が手術を受けて絶息したあと、へ私へは、「あれは自殺ではなかったろうか」(2、二八一頁)とか、「あの手術は、基督教の洗礼を受けた汐見が故意に自分を殺すための方便ではなかったか」(2、二八二頁)とか、自らに問うている。この疑問は正鵠を射ている。先述したように、汐見には現在も未来もなく、過去があるだけだった。けれども、二つの「手帳」を完結させることによって、彼は過去を生き直した。彼に残るのは、死しかない。汐見にあつては、手術は自らの死の選択であり、死を意識し、死に魅せられた果ての、一種の自殺行為であるとうけとることができ。『草の花』では、死の魅惑が或る種の自殺を招いた例が提示されているのである。



註

- (1) Pascal: *Pensées, Œuvres complètes*, Seuil, 1963, p.522.
- (2) André Blanchet: «Julien Green en proie à l'existence», in *La Littérature et le spirituel*, t.II, *La Nuit de feu*, Aubier, 1960, p.155.
- (3) 『嵐の目』、『日記』第四巻、一九四五年三月十四日、IV、八三四頁。
- (4) Jacques Petit: «Notes» pour *Les Épaves, Œuvres complètes de Julien Green*, t.II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1973, p.1382.
- (5) Jacques Petit: «Notes» pour *Le Visionnaire, Œuvres complètes de Julien Green*, t.II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1973, p.1407.
- (6) マニユエルはイエス・キリストについて、「幼年時代からほくは彼を愛していた」(II、二九〇頁)と言い、『在り得たこと』のなかでは、自分の中にのこっている「カトリックの遺産」(II、三五二頁)について語っている。
- (7) この人物は、プラス夫人の亡き夫の旧友の息子にあたる人物である。
- (8) Jacques Petit: *Julien Green, «l'homme qui venait d'ailleurs»*, Desclée De Brouwer, 1969, p.149.
- (9) 伯爵の娘である子爵夫人はマニユエルに、「わたしたちの一族では、男たちはほとんど同じ仕方で死ぬのだということを知らなければならない」(II、三三二頁)と言っている。
- (10) 作中、伯爵が子どもたちの面会を許しているあいだの、アントワヌの死の恐怖については語られているけれども、子爵夫人の反応については触れられていない。
- (11) 『容易な歲月』、『日記』第一巻、一九三二年十一月二十五日、IV、二〇七頁。